

R. Browning の恋する心の痛み

についての詩^{うた}

渡 邊 清 子

は じ め に

紀要第3号ではBrowningによる「愛の挫折」についての詩、続いて第4号では「地上で実らなかった愛の詩。」^{うた}について書いたが、今回は「恋する心の痛み」をテーマとする2篇の詩を中心にして、詩人の恋する心の一端に触れてみたいと思う。

(A) A Serenade At The Villa⁽¹⁾ について

この「別荘で奏でられた小夜曲」という詩は詩集 *Men and Women* の中に1855年にはじめて印刷され、所載されたものである。後に1863年に *Dramatic Lyrics* として区分された。しかし F. G. Kenyon が “There is no evidence to show its date and place of composition beyond the fact that it belongs to Italy.”⁽²⁾ と言っているように、その作成された時と場所はさだかでないらしい。W. C. De Vane もこの詩の書かれた時のことははっきり判らないとしているが、たゞこの詩の背景になっている場所と時について次のように述べている。“The poem obviously describes the garden of an Italian villa, on a hot, close, southern night before a storm. The landscape suggests that the

(1) 本論文に引用される2篇の詩は下記の全集のVol. 3からのものである。

Sir F. G. Kenyon; (With introductions by); *The Works of Robert Browning*; Centenary Edition In Ten Volumes, (Ams Press, Inc., New York, 1966)

(2) 上記 Kenyon 全集 Vol. 3. p. xxiv.

country is that of Bagni di Lucca, where the Brownings spent the summers of 1840 and 1853.”⁽³⁾

この詩は Browning の middle-period poem といわれるだけに実に見事に、語り手である “I” の激しい情熱が詩全体の中に哀切の言葉となってちりばめられている。蒸し暑い暗い陰気な、嵐を孕んだ夜、リュート⁽⁴⁾をもって語り手である恋人は、愛するひとの窓辺のあたりに立って、思いのたけをセレナーデに託して彼女に伝えようとしている。しかし彼の恋は全く拒否され、無視されてしまうのである。このことにつき、Thomas J. Collins は “In this poem we are given a description of the complete negation of love which contrasts both in mood and meaning with “One Word More,” “By the Fireside,” and “Love Among the Ruins.”⁽⁵⁾ と述べ、その理由をおおよそ次の如く説明する。つまり今あげた 3 つの詩の中の語り手は皆、 “...has found his “moon,” “the guiding star”. つまり彼を明るく照らしてくれる清い月、又は己を導いてくれる星を見出している。それなのにこの詩の主人公には輝く月も、彼を慰め導く星さえあたえられず、彼の愛は拒まれてしまったと言うのである。

詩の書き出しはその前夜、愛するひとの固く閉ざされた窓辺で、嵐の中で熱烈に愛の調べを歌い続けて、絶望と怒りと切なさに打ちひしがれて、家に戻って来た男の回想言葉となって進む。James Fotheringham が指摘しているように、この詩のもつ intensity はその “keenly cut phrases” や “bold romantic phrases” によって一層効果的に高められていると言ってよいであろう。詩は次のように始まる。

That was I, you heard last night,

(3) W. C. De Vane; *A Browning Handbook*, (Cornell University F. S. Crofts & Co., New York, Mc xxxv.), pp. 201-202.

(4) lute (リュート) はギターに似た弦楽器で 16~17 世紀頃に用いられた。

(5) Thomas J. Collins; *Robert Browning's Moral—Aesthetic Theory, 1833—1855*, (University of Nebraska Press, Lincoln, 1967), p. 134.

When there rose no moon at all,
Nor, to pierce the strained and tight

Tent of heaven, a planet small :

Life was dead and so was light. (st. I)

(あれは僕だったのです。昨夜あなたが聞かれた楽の音の主は。その時、月は全くその影を現わさず、又固く閉ざされた夜の帳を差し貫く小さな星一つさえ見えなかったのです。生あるものは死に絶え、光さえ消え失せていました。)

という程の意味である。次の連では辺りの不気味な程の暗さと静けさが描写されている。

Not a twinkle from the fly,

Not a glimmer from the worm ;

When the crickets stopped their cry,

When the owls forbore a term,

You heard music ; that was I. (st. II)

(蛍のきらめく光の跡もなく、土螢の放つ微かな光も見えませんでした。蟋蟀のすだく音も止み、梟の聲がしばし跡絶えた時、あなたは流れる調べの音を聞かれたでしょう。それは僕の奏でものでした。)

今みたように、1連と2連には全くいのちと光の存在が感ぜられない。T.J. Collinsも“The poem creates a mood of lifelessness which, fo Browning, is the inevitable result of unrequited love.”と言っている。⁽⁶⁾ 次の3連でみられるように大地でさえも、蒸し暑い夜を通して、歌い続けるこの男の苦しみと哀切きわまりなき調べとに胸打たれてか、その眠りを乱されて、寝返りを打った。そ

(6) *ibid.*, p. 135.

の証拠に大地が熱い溜息をついたので、一陣の熱風が吹き起った。すると天上のあちこちで稲妻が閃めいた——。その閃光が夜の帳を突き破った所から、血のように生温い雨の雫が数滴したゞり落ちて来た。かくして夜の沈黙は破られたのであった。

Earth turned in her sleep with pain,
Sultrily suspired for proof :
In at heaven and out again,
Lightning! — where it broke the roof,
Bloodlike, some few drops of rain (st. III)

この3連目の終りの3行をA. Symonsは殊更にイタリック体で書き、次のような賛辞を呈している。“The lines I have italicised are of the school of Dante or of Rembrandt. Their vividness overwhelms.”と。⁽⁷⁾SymonsはBrowningの後期の作品を特徴づける“swift sureness of touch”をこゝにも見出しているのである。

語り手である男は無情なる恋人に対し、空しく語りつゞける。

What they could my words expressed,
O my love, my all, my one!
Singing helped the verses best,
And when singing's best was done,
To my lute I left the rest. (st. IV)

(僕は自分の歌った言葉が、いかによく僕の胸の中を伝えているかを思い、満足しています。おゝ、僕の恋人、僕のすべて、僕の

(7) Arthur Symons; *An Introduction To The Study Of Browning*, (J. M. Dent & Sons Ltd., London, 1923), p. 26.

唯1人の恋人よ！ あなたに捧げる最高の詩^詩に調べをつけて歌い
終えた時、あとはもう僕のリュートに任せてしまったのです。

そうしているうちに夜は更けて行き、東の空が白んで来ました。大型に群がる小さな毒人參の花が白く見え初め、新しい1日が始まろうとしていました。労苦と重荷に満ちた早朝の時が訪れる前に、僕はもうそこを立ち去ってしまったのです。

So wore night ; the East was gray,
White the broad-faced hemlock-flowers :
There would be another day ;
Ere its first of heavy hours
Found me, I had passed away. (st. V)

上記、詩の2行目の hemlock (conium maeutatum- 毒人參) は繖形花屋の草花で、激しい毒性をもつものとして、ギリシャやローマ時代からよく知られている。その花を殊更に Browning が用いたのはイタリアでその頃、たまたま咲いていたからだ、とするには偶然すぎると思われる。その毒汁を飲まされて、従容として死についた Socrates の話は余りに有名である。がその持つ意味とは別にこの詩の背景になっている陰鬱な暗い夜と、悲哀に充ちた若者のイメージに合うものとして毒人參が取りあげられたのではないかと思われる。又例えば *Macbeth*, (IV, 1, 25) の中の魔女が、大きな鍋の中で、闇黒な真夜中に、掘って来た毒人參の根を煮つめる、悪意のこめられた気味の悪い風景 (“Root of hemlock digg'd 'n the dark”) が思い出されたりする。John Keats の “Ode to a Nightingale” の書き出しの “My heart aches, and a drowsy numbness pains / My sense, as though of hemlock I had drunk.” からみても、セレナーデを空しく奏でた若者の胸の痛みに通ずるものが感ぜられる。とすると Browning はやはり hemlock をある効果をねらって故意にもって来たのではないかと考えられもする。

What became of all the hopes,
Words and song and lute as well?
Say, this struck you—“When life gropes
“Feebly for the path where fell
“Light last on the evening slopes, (st. VI)

“One friend in that path shall be,
“To secure my step from wrong;
“One to count night day for me,
“Patient through the watches long,
“Serving most with none to see.” (st. VII)

この若者が終夜、恋人の窓の辺りで歌い続けていたことを彼女はよく承知している筈である。しかし応答が全くなかったのだから、若者のすべての希望や、切なる愛の言葉や、リュートによって奏でられた美しい調べはどうなってしまったのだろうかと疑う。そして彼はこれから悲痛な自問自答の独白を語り続ける。

どうぞおっしゃって下さい。次のようなことが僕の歌から聞き取られ、あなたの心を動かした、と——。「坂道の上に、日暮の最後の光が消えてしまった頃、私が人生の道を、足どり弱く探し求めている時、(6連) 1人の友であるあなたが、私が道を踏み迷わぬように守っていて下さるでしょう。その友は私のために、夜をも昼の如く、いとわず、辛抱強く見守って下さっておられる。ほかにそれを見ている人が誰もいなくても」と、(7連)。若者は誠に以上のような真心をもって愛するひとを助け導こうとしたのであった。しかし家の中からそれに応ずる気配がなかったので、彼は絶望的に次の如く言う。

Never say — as something bodes —
“So, the worst has yet a worse!

“When life halts ‘neath double loads,

“Better the taskmaster’s curse

“Than such music on the roads !

(st. VIII)

第8連では語り手の男は、恋人に決して次のようなこと言わないでほしいと思うが——何となく彼女がこのようなことを感じ、言われるであろう、という予感がしていたのだが——、と前置きをして、再び独白の形で、相手の女性の心を押し量って語る。

「そう、それでは、まるで最悪なることに、更に又悪いことが重なるようなものなのね！ 私の生命が二重の重荷の下に、とどまり苦しんでいる時には、路傍より聞えてくるこんな音楽を聞くよりは、苛酷な仕事を課す主人の呪いの言葉を聞く方がましです！」と。相手の女性がせめてこのような気持ちで自分の愛の詩^{うた}を聞いてほしくない^と切に独り願うのである。しかし彼女の気持ちは次のような言葉で表わされるのではないかと彼は密かにおそれる。

“When no moon succeeds the sun,

“Nor can pierce the midnight’s tent

“Any star, the smallest one,

“While some drops, where lightning rent,

“Show the final storm begun——

(st. IX)

“When the fire-fly hides its spot,

“When the garden-voices fail

“In the darkness thick and hot,—

“Shall another voice avail,

“That shape be where these are not ?

(st. X)

「太陽が沈んだ後、月の出はなく、
真夜中の暗黒の帳を貫き通すことの出来る
いかなる星の光、小さな星影1つだに見えぬ時に、
稲妻の閃めいた辺より幾滴かの雨粒が落ち初め、
最後の嵐が起ることを知らず時に——

(第9連)

螢がその姿をかくす時に
重くたれこめた蒸し暑い暗夜の中で
庭にすだく虫の音が跡絶えてしまった時に、
他の外の声が聞こえて来たとして何の役に立つのでしょうか。
螢も虫もない所に、その人影が
現われるのでしょうか。」と

(第10連)

9連と10連は1連と2連の醸し出した重苦しい雰囲気を再度描こうとしている Browning の意図が伺える。De Vane もこの点に注目して “The poem is a favorite with some because of its perfect blending of scenery and mood.”⁽⁸⁾ と述べている。我々の目で見るとの出来ぬこの女性は若者の存在価値さえ認めていない調子で、彼を “shape” 呼ばわりしている。そのみでなく、次の連に至ると、彼女は若者の心に致命傷となる言葉を弾丸の如く浴せかけて行くのである。

“Has some plague a longer lease,

“Proffering its help uncouth?

“Can't one even die in peace?

“As one shuts one's eyes on youth,

“Is that face the last one sees?

(st. XI)

(8) W.C.DeVane; *op. cit.*, p. 202.

「私にやばな援助を、与えると申し出ているかの嫌な、面倒くさい人の寿命は、まだ永いのでしょうか？ 人は平和に安らかに死ぬことは出来ないのでしょうか？ 人がその青春に別れを告げようとする時、あの顔がその人の目にうつる最後の顔でしょうか」と

若者は彼女がこれ程までに、自分を嫌がり、迷惑に思っているのではないかと、推測した時、もはやこれまでと、その場を立ち去ったのであった。彼はその時のことを次の如く追想する。

Oh how dark your villa was,
Windows fast and obdurate!
How the garden grudged me grass
Where I stood—the iron gate
Ground its teeth to let me pass! (st. XII)

若者は悲しみと憤りに、胸が張り裂けるばかりになって、門を出る前にもう一度別荘を振り返ってみた。その時のことを思い出して彼は次の如く言うのである。

あゝ、あなたの別荘は何と暗かったことでしょう。
窓は皆固く、冷酷に閉じられてしまつて！
僕が芝生の上に立って、それを踏みつけたのを庭がどんなに嫌って、
恨んだことだろう——鉄の門の扉は、僕を通らせるのに、どんなに
歯ぎしりしたことか！ (12連)

かくして若者の一方的な熱烈な愛は、見事に暗礁に乗り上げてしまった。Browning は12連の最後の3行の中に garden, grudged, grass, gate, ground 等の如く g- 又は gr の alliteration を多く用いているが、これによって若者の

いら立つ、荒々しい気持ちをよく表現していると思う。若者は恋人に冷たくあしらわれて、恋の痛みを十分経験させられるが、それだけでなく、彼が踏みつけた芝生にしかめ顔をされ、鉄の扉からまで歯ぎしりをして追い立てられてしまったというのである。このような不幸な場面を描くのには Browning が一見誇張されたユーモラスな表現を用いてさらりと書き流したのは、さすがに Browning だという感じを持たされる。この箇所につき、Berdoe は実に面白い解釈をしている。つまり “The iron gate which ground its teeth to let the serenader pass seemed to be disputing the lover’s protestations; and one fears that if his mistress was like the earth, and ‘turned in her sleep’ too, she would derive little satisfaction from his music.”⁽⁹⁾ という解釈をするのである。Berdoe に言わせると、この若者が恋人に対する恨みと抗議をのべているのに対して、鉄の扉は歯ぎしりをすることによって、この若者に反抗しているように思われる、ということになる。それから又、もし恋人が大地のように「寝返りを打った」のだったら、彼女は若者の奏でる調べから満足感はずと得られなかったのではないかと考える。Berdoe は更に “Earth has heard many serenades and many vows made only to be broken” それ故 ‘the earth turned in her sleep in pain’ と言う。だから “The lady dreamed of music, but slept on,”⁽¹⁰⁾ だ、と納得しうるようである。換言すれば、小夜曲に歌われる愛の歌や、誓の言葉はたやすく破壊され勝ちである。それ故大地は心を痛め、寝返りを打つ、しかしかの恋人は調べを夢のうちに聞きながら眠り続けた。それで若者に応答出来なかった、と想像をめぐらすのである。

以上の Berdoe の解釈の仕方には少々無理があって、ついて行けない所はあるが、一つの見方として、書き留めておくことにする。

Sutherland Orr は “A Serenade At The Villa “has a tinge of melan-

(9) Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia*, (George Allen & Unwin Ltd., London, 1931), p. 470.

(10) *ibid.*, p. 470.

choly humour, which makes it the more pathetic.”⁽¹¹⁾とし、内容は“Love as the completeness of self-surrender”を表わすもの、と述べている。この詩における Browning の詩的描写力と技法について Arthur Symons は次のようにしている。

“A *Serenade at the Villa*, which expresses a hopeless love from the man’s side, has a special picturesqueness, and something more than picturesqueness : nature and life are seen in throbbing sympathy. The little touches of description give one the very sense of the hot thundrous summer night as it ‘sultrily suspires’ in sympathy with the disconsolate lover at his fruitless serenading.”⁽¹²⁾

(B) Two in the Campagna

Sutherland Orr は「カンパニヤの二人」という詩を評して“Love as an unsatisfied yearning”として見事にうたいあげている、と述べているが、それは多くの批評家達の等しく認めるところである。この作品も前述の詩と同様に、1855年に詩集 *Men and Women* の中に記載され、後に *Dramatic Lyrics* の中に入れられた。Kenyon によれば1853年の冬から54年の春にかけて Browning 夫妻はローマに初めて住居を構えていたので、多分その春に書かれたものであろうと推測される。Campagna はローマの街を取りまく火山性の起伏している未開発な広い平野であって、その長さは90哩、幅は40哩あると言われる。以前はイタリア西部地方にある沼沢地と Tiber 河畔の浸水によって吐き出されるひどい毒気のある気体に悩まされたのだったが、今は埋立地となっているそうである。

Edward Berdoe は Browning がこの詩を書くにあたって、その背景として

(11) Mrs. Sutherland Orr ; *A Handbook To The Works of Robert Browning* (G. Bell And Sons, London, 1927), p. 229 & p. 224.

(12) Arthur Symons ; *op. cit.*, p. 124.

特に選んだ Compagna di Roma の様子と雰囲気についてくわしく紹介している。それでこの詩の理解の助けになれば、と思い、こゝに引用しておくことにする。

“Anciently it was the seat of numerous cities, and is now dotted with ruins in its whole extent. In summer its vast expanse is little better than an arid steppe, and is very dangerous on account of the malaria almost everywhere prevalent. In winter and spring it is safer, and affords abundant pasture for sheep and cattle. There is a solemnity and beauty about the Campagna entirely its own. To the reflective mind, this ghost of old Rome is full of suggestion: its vast, almost limitless extent, as it seems to the traveller; its abundant herbage and floral wealth in early spring; its desolation, its crumbling monuments, and its evidences of a vanished civilisation, fill the mind with a sweet sadness, which readily awakens the longing for the infinite spoken of in the poem,…”⁽¹³⁾

Browning 夫人が5月10日の手紙の中で Kembles 姉妹達と Campagna に行ったと書いてあるのをみると、やはり De Vane の言うように第一連にある5月の朝は、前述の1854年のものと思われる。この一篇の内容を簡単にまとめるとするなら、この詩の最終の2行、つまり、“Infinite passion, and the pain/Of finite hearts that yearn.” ということになると思う。換言して要約すれば、有限なる心の中に、無限の情熱を求めようとして、それを果し得ぬ心の痛みを訴える男の抒情的な独白である、と言ってよいと思う。その苦しい訴えを、聞かされている女性が Elizabeth Barrett Browning であるか、否かについて、かなりうるさく論議され、Sharp や Blackburn は賛意を表しているが、Mrs. Orr

(13) Edward Berdoe; *op. cit.*, p. 553.

はBrowning 夫妻との個人的な関係をほのめかしているものは全くないと、否定している、と言われている。James Fotheringhamは “This poem is in the main a love-poem, but it deals through that with a wider theme, and with a larger aspect of life—with an experience that relates to life as a whole.”⁽¹⁴⁾と、恋愛を広い立場と高い視野から捕え、人生全体に関係づけて行こうとしている詩である、と評している。

では Two In The Campagna の詩を読んで、詩人の声を聞いてみよう。

I wonder do you feel to-day
As I have felt since, hand in hand,
We sat down on the grass, to stray
In spirit better through the land,
This morn of Rome and May? (st. 1.)

Browning の詩は相変らず難解であるが、前後の関係から推量してみると、第一連の大意は次の如くなると思う。二人の恋人が Campagna の野辺にいる。時は晴々とした五月の朝である。男は愛する人に次のように問いかける。かつてのある日、この Campagna の草原にて、彼女と手に手を取り合って坐りながら、互に心の中では広野の上をいつもより楽しい気分で、逍遥しようとしたあの日のことを、今私が思い出しているように、あなたも思い浮べているであろうか？と。(第一連)

For me, I touched a thought, I know,
Has tantalized me many times,
(Like turns of thread the spiders throw

(14) James Fotheringham; *Studies of the Mind and Art of Robert Browning* (Horace Marshall and Son, London, 1900), p. 218.

Mocking across our path) for rhymes

To catch at and let go.

(st. 2.)

私はといえば、私を絶えずいらだゝせた1つの思いを思い浮べていた。それは詩になりそうであって又詩にもならないようなものであった。それは私が思い悩んでいる問題の解決への道を明らかに出来そうにさせたり、させなかったりしたのです。それはからかい半分に道をさえぎるために、投げられた薄い蜘蛛の巣のように、私をいらだゝせる思いであった、と男は恋人に胸中の1端を打ちあける。(第二連)

Help me to hold it! First it left
The yellowing fennel, run to seed
There, branching from the brickwork's cleft,
Some old tomb's ruin; yonder weed
Took up the floating weft,

Where one small orange cup amassed
Five beetles,—blind and green they grope
Among the honey-meal: and last,
Everywhere on the grassy slope
I traced it. Hold it fast! (st. 4)

その思いをはっきり掴ませてほしい。先ずそれは(その思いは)、実が入って、その葉が黄ばんでしまった茴香(ウイキョウ)の花から熟した種子となって逃げ出し、ある朽ち果てた古い墓石の煉瓦の割目から枝を出している。そして結局、その思いは、彼方の雑草の中に入って、蜘蛛の糸のような軽い浮遊する妄想となって消えてしまった。(第3連)

雑草の中の1箇の小さな蜜柑の花の中に、5匹の甲虫が集合していた——蜜に酔ってふらふらになったのや、緑色の甲虫が、蜜を含んだ花粉の中を手探りしながら生気に溢れ、ぶんぶんうなっているのもいた。その辺りの草原の傾斜した所のあちこちに私は私の思いを発見し、それをしっかり掴まえておきたい！
(第4連)

以上の第3と第4連に見られるように若者は二人で来た思い出の地 Campagnaを訪れて、かつての感動を呼び起し、自分の心にわだかまる問題解決をなそうとするが、空しく終ってしまいそうで気が気でない。

The champaign with its endless fleece
Of feathery grasses everywhere!
Silence and passion, joy and peace,
An everlasting wash of air—
Rome's ghost since her decease. (st. V.)

5連目に入ると Browning は若者を段々と詩の核心に導いて行く。久方振りに恋人と共に若者が立った広々とした Tiber 河畔の Campagna には、羊の毛のように柔らかい草が一面に繁っている！静寂と情熱、歓喜と平和が至る所に充ちている。それに絶えることなくすぎ行く風の心地よさよ—。されど、今この辺りは、會ての華美と豪華を誇ったローマの全盛時代の面影を偲ぶよすがとなるものはなく、唯茫漠とした荒野があるのみ…。(第5連)

Such life here, through such lengths of hours,
Such miracles performed in play,
Such primal naked forms of flowers,
Such letting nature have her way
While heaven looks from its towers! (st. VI.)

ローマが栄えた当時から今日に至るまでの、かくの如き永い時の流れの中を、どれ程多くの生命がここに存在し、どれ程多くの奇蹟的な自然現象が、この地でくり拡げられたことだろう。ここにはこのように原始さながらの、飾りをつけぬ裸のままの花の姿があり、自然はかくの如く、思うがままに自然の営みを続けさせられているではないか。天が高き^{くら}み座より見下ろしていられる時に！

(第6連) T. Blackburnは“*This is an assertion of the goodness of sensuality*”⁽¹⁵⁾と、この連について述べ、続いて“*Nature has her way under the eye of Heaven...*” “*There is no disharmony between the claims of earth and heaven, spirit and flesh.*”⁽¹⁶⁾とつけ加えている。

若者は様々な思いをめぐらせていたが、愛する恋人に次のように話しかける。

How say you? Let us, O my dove,
Let us be unashamed of soul,
As earth lies bare to heaven above!
How is it under our control
To love or not to love? (st. VII.)

あなたにどのように話したらよいのでしょうか。最愛なるひとよ！私達は互に心に抱いている思いを恥じないでおきましょう。大地が天の下にても、恥じることなく、あるがままに、自然に息づいているように。愛するとか、愛さないとかいうことは、どうして理智の力で制御出来ましょうか。ひとが異性を愛することは、言わば天の至上命令の如きで、理性の力の外の力によるのだから、恥じることはないでしょう、と。(第7連)

前記第4, 5, 6連に、暗暗のうちに指摘されていたが、若者を悩ましていた思いの中核となっていたものこそは、人生と愛とにまつわる不可解な大きな謎

(15) Thomas Blackburn; *Robert Browning, A Study Of His Poetry* (Eyre & Spottiswoode, London, 1867), p. 49.

(16) *ibid.*, p. 50.

であり^{ひめごと}秘事であった。彼は Campagna の広大な地に立って、国家興亡の長い歴史をよそに、天の下にて、何ら恥じることもなく、生と愛と雌雄の交配の営みが受け継がれ、多くの生命が息きづいているのをみて、意を強くしたのであった。上述の第6、第7連について、N. B. Crowell は “In these lines is seen Browning’s lifelong insistence on the rightness and wholesomeness of love and sex. Fecund nature is looked upon with approval by heaven, and likewise man should be unashamed of his nature.”⁽¹⁷⁾ と Browning がかねてからもっていた持論を取りあげている。まさに Browning はこのように他の生物と同様に、人間に於ける愛と性とのいとなみは正当な自然的、健康的、有益的なものであると、生涯を通して主張し続けた。種の保存と繁栄が天の欲する所であれば、人はこれを尊び、恥じとすべきでない、彼は多くの作品の中でうたい続けている。この詩の主人公もこのことを恋人に説こうとしたものと思われる。

I would that you were all to me,
You that are just so much, no more.
Nor yours nor mine, nor slave nor free!
Where does the fault lie? What the core
O’ the wound, since wound must be? (st. VIII.)

あなたがそっくり全部私のものであってほしい。けれどあなたはある程度までは私のものであるが、それ以上のものではない。あなたは自分自身の自我を主張するでもなく、私に従属しているものでもない。あなたは奴隷でもなければ自由でもない！このどちら付かずの状態の原因は何であろうか？この状態を招いた欠点がある筈だ、その欠点とは何だろうか。(第8連) 若者はかく問いつつ、自分を苦しめている思いの解明の核心に近づいて行くのである。

⁽¹⁷⁾ Norton B. Crowell; *A Reader’s Guide to Robert Browning* (University Of New Mexico, U. S. A., 1972), p. 189.

恋するこの若者は、彼女と共に一心一体になりたい、と願う激しい熱情 (passion) に駆られて次のように続ける。

I would I could adopt your will,
See with your eyes, and set my heart
Beating by yours, and drink my fill
At your soul's springs,—your part my part
In life, for good and ill. (st. IX.)

私があなたの意志を自分の意志とすることが出来れば良いのだが、あなたの目でものを見ることが出来、あなたの心臓の鼓動に合わせて、私の心臓を鼓動させることが出来、そしてそうすることにより一切の感情を共有することが出来、あなたの魂の泉の水を心ゆくばかり飲むことが出来れば良いのだが、善くても、悪くても、あなたの人生の役目を、私の人生の役目として受けとめていきたいものだ。(第9連)

第8連と9連にみられるように若者は心より誠心誠意、彼女を愛しているし、彼女も恐らく彼を同じく愛しているに違いないが、彼ら2人はなぜか完全に霊肉一致の1体になることが不可能であることを繰り返して経験する。第3連でみたように、彼はなぜそうなのか、その謎を解くよすがともなるであろう蜘蛛の巣を、恋人にしっかり押えてもらって、破れないように手伝ってくれるように頼んだ。しかしそれは破れ、目に見えない空中に飛び去り、消えてしまった。それで謎は解けぬまゝ残ったのである。Symons は2人のこの状態を同情的に次の如くまとめたのべる。"The two can never quite grow to one, and he, oppressed by the terrible burden of imperfect sympathies, is for ever seeking, realising, losing, then again seeking the spiritual union still for ever denied."⁽¹⁸⁾ Mrs. Orr はこれは恋する人々に課せられた運命的な

(18) Arthur Symons; *op. cit.*, p. 125.

苦しみであるから、それを甘受すべきである、と考えている。E. Berdoe は “As pleasure, learning, wealth, have failed to satisfy the soul of man, so not even Love, the holiest passion of the soul, can satisfy the human heart, which can rest in God alone.”⁽¹⁹⁾と述べ、最後に “The restful music, the anodyne for the pain of yearning hearts, comes from no earthborn love, however pure.”⁽²⁰⁾とつけ加える。Berdoe は喜びも、学問も富も、人間の魂を真の意味で満足させることは出来ない。同様に最高にして神聖なる熱烈な愛情でさえも、人の心に絶対なる満足感とは与え得ない。それは神の御許でのみしか与えられないものである。恋い慕う心の痛みをいやすための楽の音も、鎮痛剤もない。いかにそれが清いものであってもこの地上の愛からでは得られない、と説く。

Blackburnは連8について次のような解説を加える。“Yet like all human experience, though with a special intensity, love reveals its impasse. It suggests an at-oneness between a man and a woman which in point of fact can never be completely realized. Duality must remain, the separateness of one self, the otherness of the other. However satisfying the communion, it can never wholly absorb our desire which must go beyond any human relationship.”⁽²¹⁾一対の男女間の霊肉一致の問題がよく称えられるが、それを完全に現実的に実行出来るものではない。なぜなら duality (二元性) という問題が残るからである。つまりそれは、各が異なった独立性と個性を持つ2つの個が、混合するというのでなく、完全に1つに融合しようとするからである。いかに2人の融合が緊密であっても各が独立した個である以上、決して完全に相手の希望やあこがれをかなえてやることは不可能である。その理をこの詩の主人公は冷静に理解するのが肝要であろう。同時に又一方が他方に奴隷の如く隷属したり、されたりすること等は到底考えられない。

(19)と(20) Edward Berdoe; *op. cit.*, p. 553.

(21) Thomas Blackburn; *op. cit.*, p. 50.

Blackburnは若者が投げかけた問に対して“wound”や“fault”は人間の“fallen” humanity (墮落した人間) のconditionの故であると説く。“We are involved in both a finite and infinite scheme of existence. We are circumscribed by our ego and everyday awareness and yet touch over into ‘unknown modes of being’. Our desire for knowledge and experience must exceed the reach of our intelligence and five senses.”⁽²²⁾ 我々は有限と無限の両世界と常に係わり合いを持っている。そして日々を我欲の世界に閉じ込められて生きている。それでも未知なるもの、無限なる高き本質的なもの、神、等に目を向けざるを得ない。我々の求めるものは知力や五官を通して求め得るものより、遥かに大いなる知識と経験とを追い求めるべきである、と Blackburn は Browning がこの詩で意図していたであろうことを力説している。

それにも拘らず、第9連に於いて若者は、美しい恋人を熱愛するの余り、彼女を最も完べきなものと思い込み、自己という殻を脱ぎすて、彼女とすべての点で文字通り、1つ(oneness)になりたいと切望し、前述の如く熱烈な言葉を連ねる。しかし Browning の若者はこゝに思いもかけぬ落とし穴のあることをやがて知るのである。

No . I yearn upward, touch you close,
 Then stand away. I kiss your cheek,
 Catch your soul's warmth, — I pluck the rose
 And love it more than tongue can speak —
 Then the good minute goes. (st. X.)

若者はさすがに前の2連で、希望したことが叶う筈がないと思わしめられる。だから10連目では、私はあなたに崇高なる思いで憧れをつのらせて来たので、もう今はあなたにじかに触れてみたという。すると貴女はさっと身を引いてし

② *ibid.*, p. 50.

まい、2人の心は離ればなれになってしまった。私はあなたの頬^{ほほ}に口付けをし、あなたの魂の温さそのものに触れ、それを捕えることが出来る。私はばらを摘み取り、それを言葉で言いつくせぬ程に、こよなく愛でる。—するとその瞬時の至福は留まることなく、逃れ去ってしまう。丁度2つの心がやっと1つに融合出来たと思ったその至福の瞬時の如くに。

かくして彼が求めて止まなかった甘い恋の実の味わいが、はかなく消え去るのを身をもって経験させられる。多くの人々はこのCampagnaに於ける詩は“The Last Ride Together”と同様に“failure in love”をテーマにしていると考へがちであるが、それは間違いであるとCrowellは主張する。彼は “It is, rather, a study of the nature of love, which is imperfect, being of this earth. Since love to Browning was the most precious thing in life, man's inability to attain perfection in love remained the great mystery.”⁽²³⁾ 彼は更に続けて “Love alone, however rapturous, cannot fill man's life. Nor can lovers find a common identity however great their love.”⁽²⁴⁾ といふ。それではこれ程の熱烈な愛がなぜ彼が求め続ける “absolute ideal” を勝ち取ることが出来ないかが問題になる。

第10連で今我々がみたように若者は “good minute” を捕えたかの如く見えたがそれを逃してしまった。その原因となったのは2人の間に置かれた思わぬ障壁であった。William Whitlaはこの経緯につき以下の如く述べる。 “The lovers cannot merge their separate personalities in a self-giving of soul to soul. For a moment it seems that the barrier between the lovers is about to vanish Love seemed to be about to become eternity, but the selves of the lovers interfered. Love as a mode of knowledge is lost; the illumination is gone.”⁽²⁵⁾ と。それから愛の果すべき

⁽²³⁾と⁽²⁴⁾ Norton B. Crowell; *op. cit.*, p. 189.

⁽²⁵⁾ William Whitla; *The Central Truth; The Incarnation in Browning's Poetry* (University Of Toronto Press, Canada, 1963), pp. 94~95.

役割と責任に触れて行く。“The love which comes from incarnational individuality gives all, gives up all, and forgives all. That is the action of the self that is required and demanded by love,... But the lovers in *Two in the Campagna* remain two; they cannot give all and give up all; their selves interfere, and so they lose all.”⁽²⁶⁾ 主人公がこの詩の中で求め続けた1つの思いとは何か、の解答はこゝに明確に出ていると思う。即ち、それはこのようなbarrier(障壁)を築いて相対しているfiniteな恋人同志がinfiniteなpassionを夢中になって追い求めるが故に不安と、焦燥と、苦痛が伴うのだということである。

最後の2連を読んでみることにしよう。

Already how am I so far

Out of that minute? Must I go

Still like the thistle-ball, no bar,

Onward, whenever light winds blow,

Fixed by no friendly star? (st. XI.)

Just when I seemed about to learn!

Where is the thread now? Off again!

The old trick! Only I discern —

Infinite passion, and the pain

Of finite hearts that yearn. (st. XII.)

私は今どうしてあの至福の時から、こんなに遠く離れて来てしまったのだろうか? 私はそよ風が吹き来たる時、いつでも、何ものにも、さえぎられずに、風のまにまに、薊の種子のように、どこまでも飛んで行かねばならないのだろうか。私を思想的に共鳴させるか又は、憧憬の念をもって私が、追い求めざる

⁽²⁶⁾ *ibid.*, p. 95.

を得ぬような友に引き留められることなしに。(第11連) 若者の深いため息が聞えるようである。

私が今、丁度愛の秘事を悟りかけていたという時なのに！又いつもの如くそれをたぐるその糸はどこに行ってしまうのか？又離れて行く！切切、と限りなく拡がる熱情と、それを求めて止まる限りある心の痛み——このことがやっと私に理解出来ただけである、と若者は言う。Browning がよく言うように我々は常に何か真理を学び得たと思った時でも、次の瞬間にお先き真っ暗な不確かさの中に追い込まれてしまうことがある。それを Browningは “The old trick” と名付けたのである。だがそこに止まらず目的に向って前進せよと彼は常に我らを励ます。

第1連から12連に至るまで Browning は何とかして、人生の一大事である愛の神秘と秘事についての“おもい”をまとめようと努力した。蜘蛛の巣の如く薄い網を張って「結論」を捕えようと模索して来た。しかし今まさにそれが得られそうになった時、ポツンと切れた蜘蛛の糸のように消え失せてしまった。そして結局、手許に残ったのは、最後の2行の真理であつたことを若者の口を借りて語らせているのである。

おわりに

今回取り上げて書いた詩人の2つの詩のうちの“A Serenade At The Villa”は勿論のことであるが“Two In The Campagna”は私にとって難解で骨が折れた。もとより筆の遅い筆者ではあるが、今回は特に遅々として筆が進まず、途中で何度もやめてしまいたいと思った程である。しかし Browning の詩集の中に盛られている励ましの声に、力づけられ、貪しい稿を書き終わることが出来、感謝である。最後に2番目の詩に対して、Browning の意をよく汲み取っていて、参考になると思われる2人の研究者の言葉があるのでここに記しておきたいと

思う。

Norton B. Crowell の説

- I. "'Two in the Campagna' is Browning's finest study of imperfection in love and the essential isolation of the human heart. The theme is the finite, limited, unpredictable nature of love and the impossibility of achieving oneness with any other person, even in love. No poet of the age so often saw the riddle of life in terms of man's uniqueness, his individual personality, his essential isolation."⁽²⁷⁾
- II. "Even love, the supreme value of life, is marked by imperfection, since life denies absolutes. In this poem Browning is denying the Romantic view of love as all-embracing, all-consuming, and absolute. Perfection implies stagnation, and stagnation is death. Only through struggle does life achieve meaning, for in struggle there is growth. Man is most severely tested when failure destroys love, his finest possession."⁽²⁸⁾

James Fotheringham の説

- I. "Love is ever to seek because it is ideal, and the heart is restless because passion is infinite, while satisfaction is and must be finite. And so this poetry is romantic and passionate, rendering not merely the force but the mystery of passion."⁽²⁹⁾

⁽²⁷⁾ Norton B. Crowell ; *op. cit.*, p. 186.

⁽²⁸⁾ *ibid.*, p. 186.

⁽²⁹⁾ James Fotheringham ; *op. cit.*, p. 487.

参考文献（脚注にある以外のもの）

1. *Men And Women Vol. 1*, ((Kenkyusha British & American Classics No. 111) 1963. (With Introduction & notes by Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa.)
2. *Men And Women Vol. 11*, (Kenkyusha British & American Classics No. 112) 1961. (With Introduction & notes by Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa.)
3. *Select Poems of Robert Browning* (Kenkyusha British & American Classics No. 113) 1964. (With Introduction & notes by same as above).
4. 大庭千尋訳; 「ブラウニング・男と女」国文社, 1975.
5. 大山毅訳; 「ブラウニング・男と女」鷺の宮書房, 1966.